

令和6年度 宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議市町村情報交換会 概要

区分・会場	県南部 角田市市民センター 201会議室
開催日時	令和6年10月30日(水) 午後1時30分から午後3時30分まで
出席市町村 (出席者数)	仙台市(1)、白石市(1)、名取市(3)、角田市(6)、七ヶ宿町(1)、大河原町(5)、 村田町(1)、柴田町(4)、川崎町(1)、丸森町(2)、山元町(5) 計30名
アドバイザー (連絡会議会員)	東北こども福祉専門学院 副学院長 大坂 純 氏 角田市社会福祉協議会 事務局次長 岡本 圭一郎 氏 仙台市地域包括支援センター連絡協議会 幹事 菅原 幸江 氏 公益財団法人 さわやか福祉財団 インストラクター 渡邊 典子 氏
オブザーバー	宮城県仙台保健福祉事務所(2)
情報交換での 主な意見・内容	<p><u>テーマ①「協議体の進め方や内容について」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協議体のテーマや進行の工夫、活用方法 等</li> <li>○ 協議体のテーマとして、「高齢者の移動支援」「買い物支援」について話し合っている市町が多い。</li> <li>○ 2層協議体において、まちづくりセンターで移動支援を行うことが決まった。</li> <li>○ 移動販売による安否確認を行っている。</li> <li>○ 2層コーディネーターの委託先が、地域住民、自治会の集落支援員、復興協議会の方等、市町によって様々だったことが参考になった。</li> <li>○ 協議体では、1層、2層協議体の情報共有や課題を抽出する内容で話し合っている。</li> </ul> <p><u>テーマ②「関係機関との連携について」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他事業や各種団体、他部局、民間企業との連携 等</li> <li>○ 民生委員、包括、生活支援 Co が一緒になって個別世帯訪問していることが良い取組と思った。</li> <li>○ 学校関係(福祉教育部やボランティア部)、農業、子ども食堂と連携が取れている。</li> <li>○ サロン立ち上げで企業が場所を提供してくれて、地域交流につながった。</li> <li>○ ケアマネがデイとサロンが被らないようにケアプランを調整している。</li> <li>○ 町内社会福祉法人で「社会福祉法人連絡会」を5～6回開催。買い物支援や入浴支援について話し合っている。</li> <li>○ 移動販売のニーズについて。実際にやってみると、移動販売の利用者が少なかった。</li> <li>○ 行政、包括、1層・2層コーディネーター、他事業所との連携が多い。</li> <li>○ コーディネーターの顔を覚えてもらうためアウトリーチを多く行っている。</li> </ul> <p><u>テーマ③「地域資源とのマッチングについて」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援ニーズと多様な活動のマッチングの実践 等</li> <li>○ 新聞屋との連携：見守りの実施。何日か溜まっているとすぐ連絡がくる。</li> <li>○ 生協との連携：見守りの実施：宅配の際に何かあると連絡がくる。</li> <li>○ 床屋との連携：地域の大変な人が集まる、集いの場になっている。</li> <li>○ 学校との連携：福祉体験の実施</li> <li>○ セブンイレブンとの連携：移動販売車の見守りで様子がおかしいと連絡がくる。</li> <li>○ 郵便局との連携：何度も通帳を作りにくる方がいると連絡が来る。</li> </ul>

	<p>○関係する団体と目線合わせが大切と学んだ。</p> <p>○ 片づけられない課題に対応するため、思い出の品（こけしや熊の置物）をアート美術館として展示するイベントを実施。町の環境課と繋がり取組みに至った。</p> <p>○ 平均70歳のバンド活動グループが敬老の集いで演奏。栄養士会協力のもとラフターヨガも実施。</p> <p>○ 人とのつながりを広げたい意見がでた。（一人のひとに色々役がついているので）</p> <p>○ 男性にフォーカスし、すでに動いている人にスポットを当てている。</p> <p>○ 区長、民生委員、行政とつながりができている。</p> <p>○ 民生委員との情報交換を月に1回実施。</p> <p>○ 障害支援専門員のケアマネとつながる。</p> <p>○ 包括の総合相談に時間を持っていかれるという意見もあった。</p> <p><b>テーマ④「今力を入れて取り組んでいること」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協議体でこんな取組をしている</li> <li>・集めた地域資源を一覧にして、関係者に周知している</li> <li>・今後の展望 等</li> </ul> <p>○ 老人クラブの運動大会に大学生をマッチングしている。</p> <p>○ マップづくりに力を入れて取り組んでいる。</p> <p>○ たまり場マップを作っている。（マクドナルドとも連携している）</p> <p>○ その地域で何が必要か全戸配布アンケートをとっている。</p> <p>○ ボランティア向けの研修会等の実施。</p> <p>○ 住民も2層 Coとして活躍している。地域ケア会議を見直すことに力を入れている。</p> <p>○ 住民を混ぜて、課題をどう解決するかの話し合いに力を入れている。</p> <p>○ 住民から問い合わせの多い「移動販売」について情報をまとめている。</p> <p>○ 社協、包括、民生委員が連携し介護認定を受けていない人へ個別訪問をしている。このアウトリーチを3年続けており、支援が必要な人のサービス利用に繋がった。</p> <p>○ フリーマーケット開催。終活としてシニアの方が多数出展した。元気なうちに片付けができた。</p>
<p>アドバイザーからコメント</p>	<p><u>&lt;渡邊氏&gt;</u></p> <p>○ 10年前とは随分変わってきている。福祉と関連のあるところについては連携が取れつつある。10年前と比べると情報の共有ができている。社協や包括が主催する所への参加や声かけは必要。</p> <p>○ 私たちの活動の目的を常に意識の中に持つとよい。安心して最期まで生活できる地域づくりに貢献する活動を地域住民と一緒にしている。</p> <p>○ “安心・つながる・支え合う”は目に見えないので、評価の視点は簡単ではない。しかし着実に地域づくりは進んできていると感じた。</p> <p>○ 孤独・孤立問題、重層的支援体制整備、生活支援体制整備の問題等、色々なものがごちゃまぜになっている。安心して生活できる地域づくりへの意識を持ち、これから少しずつ整理して、諦めないことが大切と改めて感じた。</p> <p><u>&lt;菅原氏&gt;</u></p> <p>○ 地区長や民生委員などを交えて、高齢者に限らず障害者や色々な人を含めて現在の困り事について話し合いができるとよい。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ この業務はコーディネーターだけに任せるのではなく、職員全体でチームワークとして支えないと上手くいかない。</li> <li>○ 一人ひとりが少しずつ見守り支援をしていけば、より良い地域に向かっていく。若い頃から近所との交流は大切で、声を掛け合う大切さを感じる。</li> </ul> <p>&lt;岡本氏&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域資源や関係機関との連携で、幅が広がってきたのではないかと思う。</li> <li>○ 集まりというと以前は「サロン」が出ていたが、今は施設や企業とのつながりについて話が出ていて大分変わってきたと感じた。</li> <li>○ 生活支援コーディネーターの仕事は一人でできるものではなく、沢山のひとと一緒にやる仕事。担い手がいない話も出ていた。補うのは高齢者や私たちになるが、一人ではなく複数で関わることがこれから必要になるのではないか。</li> </ul>
<p>全体講評 大坂議長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生活支援コーディネーターは何をする人なのか周りの人にしっかり理解してもらうことが勝負。地域の中でどれだけ助けてくれる人を作るかが重要。</li> <li>○ 計画に基づいて“生活支援コーディネーターはこの部分を担い、実施するためにこのようなことをしている”と色々な立場の人に分ってもらうこと。</li> <li>○ 協議体は開くことが目的ではなく、何のために開かれているのか、何を期待して来てもらっているのか、その目線合わせをしながら進めていくことが重要。</li> <li>○ 協議と活動は一体となっているので、出来るところから出来る範囲で、一緒にやってくれる人をどれだけ作るかが重要。</li> <li>○ マップを作ることを目的にしてはいけない。何の目的で、誰に使ってもらえるのかははっきりさせること。ケアマネや住民に使ってもらえることが重要。</li> <li>○ 自分たちは何に基いて何のために動いているかを考えながら、次に進んでいくこと。協議体もマップも道具でしかないので上手に使うこと。これをしっかり意識しながらやることが重要である。そうすると自然と地域づくりが出来ていく。</li> </ul>

区分・会場	仙台 フォレスト仙台 第1・2フォレストホール
開催日時	令和6年11月18日(月)午後1時30分から午後3時30分まで
出席市町村 (出席者数)	仙台市(8)、塩竈市(1)、名取市(5)、角田市(2)、岩沼市(6)、町(0)、富谷市(2)、亘理町(2)、七ヶ浜町(2)、大和町(3)、大郷町(1)、大衡村(1) 合計33人
アドバイザー (連絡会議会員)	東北こども福祉専門学院 副学院長 大坂 純 氏 角田市社会福祉協議会 事務局次長 岡本 圭一郎 氏 宮城県社会福祉士会 真壁 さおり 氏 宮城県社会福祉協議会 地域福祉部長 及川 一之 氏
オブザーバー	全国コミュニティーライフサポートセンター仙台(1)
情報交換での 主な意見・内容	<p><b>テーマ①「協議体の進め方や内容について」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・協議体のテーマや進行の工夫、活用方法 等</li> <li>○ 協議体の中の研修委員がテーマを決めており、認知症をテーマに実施した。</li> <li>○ 区長や民生委員が協議体のメンバーになっている。</li> <li>○ 買い物支援を核に、企業や地域の高齢者それぞれの地域貢献活動について話し合った。</li> <li>○ 1層圏域は年3回の協議体実施が目標。1層協議体では座談会を行っている。</li> <li>○ 何が地域で必要かについて、アンケートを実施し600人から回答があった。近所関係の希薄、免許返納後の生活が課題という回答もあった。</li> <li>○ アンケートでゴミ出しについてテーマが挙がり、ヘルパー用ゴミ出しの設置に繋がった。</li> <li>○ 協議体にてスーパーマーケットと地域を繋ぐ活動をした。 <ul style="list-style-type: none"> <li>1回目：スーパーが地域に対して行なっていることの情報収集。</li> <li>2回目：介護保険事業所の声を聞く。</li> <li>3回目：マッチング。スーパーは地域貢献。福祉サービスとして作品展示。</li> </ul> </li> <li>○ スーパー側が認知症や地域密着のことをある程度知っていること。</li> <li>○ 見守りをテーマに協議体で話し合い、ゆるやかな見守りリーフレットの作成に至った。</li> <li>○ 包括がテーマを決めて(例：オレオレ詐欺、虐待など)講義と話し合いを行うことを協議体としている。理想は課題に対して解決策まで持っていく話し合いがしたい。</li> <li>○ ゴミ出しをテーマに協議体で話し合っている。市の事業として進められるようにしている。</li> <li>○ 情報共有で終わらない会議がしたい。</li> <li>○ 民生委員定例会を2層協議体に位置づけられないか考えている。</li> <li>○ 意見交換でデマンドの活用について話が出て、町づくり政策課も入り、デマンドツアーを実施した。</li> <li>○ ゆるやかな見守りをテーマに協議体を開催。リーフレットを作成した。</li> </ul> <p><b>テーマ②「関係機関との連携について」</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他事業や各種団体、他部局、民間企業との連携 等</li> <li>○ 市町村の担当職員とも気軽に連携・連絡できる体制がある。前任の担当者とも気軽に相談できるため、良好な関係を築けている。組織的にやるものではないという意識がある。</li> </ul>

- 複数コーディネーターがいる中で、コーディネーター間での連携があと一歩と感じるところがある。
- 教育委員会なども巻き込みながら、多世代のアプローチをしている。
- 他事業を持っていることで、地域と繋がりやすくなる側面がある一方で、事務的な兼ね合いで地域に出にくい面もある。
- 実績で評価していく事業でもあるため、数字を求めすぎた結果、動きにくさが生じることもある。

#### テーマ③「地域資源とのマッチングについて」

##### ・支援ニーズと多様な活動のマッチングの実践 等

- 認知症地域支援推進員の研修。認知症サポーター養成講座を実施し、認知症の理解を企業に促す。
- 移動支援がテーマになっている市町村が多い。地域特性によって差が大きい。担い手不足、担い手の高齢化があり、マッチングの具体的な実践までには至っていないと感じている。

#### テーマ④「今力を入れて取り組んでいること」

- ・協議体でこんな取組をしている
- ・集めた地域資源を一覧にして、関係者に周知している
- ・今後の展望 等

- 事業を行うときの成果は何かを考え、やること自体が目的とならないようにする。
- ケアマネや支援者向けの研修会を実施し、支援者から足並みを揃えている。次年度は圏域毎に実施予定。
- 2層協議体から1層協議体に課題が上がる仕組みづくり。
- 地域資源シートを今後一般公開していきたい。更新と再調査に時間がかかる。
- 地域ワンダー（年8～10回協議体）は各関係機関、企業、様々な団体のPRの場所。
- 集めた情報資源をどのように発信しているか？  
⇒広報誌「おらほの社会資源」発行。お宝発表会での周知。
- お互いに助け合える関係性の構築  
⇒コーディネーターとしての周知はまだ足りないかもしれないが、包括の窓口としては機能できている。
- 高齢者の集まりや団体を見かけたら、積極的に声をかけて何をしていたのか聞く。
- 地域で元気に活動を引っ張っていってくれるような人を探したい。
- 社協と行政が月に1回、顔を合わせて意見交換し、風通しがよくなるようにしている。
- 認知症カフェの立ち上げ。
- キッチンカーを活用して地域に入っている。
- お宝探しなどを通じて得た情報を整理している。
- 既存の地域ケア会議を活用した取組み。
- 多世代間の交流に力を入れている。腰の重い親世代を巻き込むためにも、小中学生に焦点を当てながら。
- お宝発表会の開催に向けた取組み。コロナ禍からのスタートで地区の実情把握が進みにくいことがあったが、コロナ明けからは市町村事業などを通じて、

	<p>コミュニティの把握に努めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域の意見交換会を通じて、各地区の課題や強みの把握に努めている。</li> <li>○ 包括、ケアマネ向けの研修会を開催予定。地道に説明していく。</li> </ul> <p><u>「その他意見等」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 年明け頃に地域資源シートを公開する予定。包括から情報収集中。</li> <li>○ 生活支援のサービス、サロン等のリーフレット。</li> <li>○ 地域カルテを毎年更新（情報の健康診断）</li> <li>○ 資源の見える化で悩んでいる。発信するにも報告書の作成など提出書類が多くて大変。</li> <li>○ 世代交代のタイミングは必ずあり、長く関わることでコーディネートする機会がきつとくる。</li> </ul>
<p>アドバイザー からコメント</p>	<p><u>&lt;及川氏&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ この事業に携わったのは平成30年から。高齢の方々が今住む地域で暮らし続けるために何をするかというのがこの生活支援体制整備事業であるが色々な形で話し合いがされてきた。</li> <li>○ 5年前「誰でもできる地域づくりハンドブック」を大坂先生が中心となり作成された。わからなくなった時や悩んだ時に読んでいただき、関係する人で一緒に勉強会をしたり、アドバイザーに入ってもらって、振り返りをしたりしながら話を進めていこうという主旨の本である。</li> <li>○ 大きなヒントも書かれているので、地元の町の特徴を活かしながら、ベースとなる考え方を参考にしてほしい。</li> <li>○ この本は出版された時に事務局から各市町村、社協、包括すべてに配布した。これを読みながら関係者と話すのは大事と思いPRさせていただいた。</li> </ul> <p><u>&lt;岡本氏&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 県南会場の情報交換会にも参加したが同じような内容が出ていた。</li> <li>○ コロナが明け住民活動が動くようになり、高齢者も増えてきた中で、包括業務と兼務の生活支援は後回しになって、なかなか生活支援業務では外に出向けない悩みが聞かれる。</li> <li>○ 関係機関の連携は重要で、人が少なくなり、役割が多くなると企業に目を向けることも必要になる。</li> <li>○ 事業当初は何をしていいのかわからないというコーディネーターの声も多くあったが、今はそういう声もなく、事業に真剣に取り組んでいることが皆さんの発表を聞いていてよくわかった。</li> </ul> <p><u>&lt;真壁氏&gt;</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 各市町村の共通点は皆さんが地域づくりのプロセスにしっかり乗っていることである。</li> <li>○ 顔見知りになり信頼関係ができることからスタートし、地域や関係者を良く知る⇒話し合いや協議が行われ色々な活動が生まれる⇒振り返る、ということが循環していく。</li> <li>○ 不安な思いに駆られることがあった時、地域づくりのプロセスの何処かに何かしら見直す点や足りないところがあると振り返ることがあると思うが、その中にヒントが隠されている気もする。</li> <li>○ いきなり関係性がないのに一緒に事業をやりたいと言ってもできないので、関係作りからコツコツ積み上げるか、プロセスの中の自分の位置を知り、見直しが必要かを考えるとヒントが見えてくると思った。</li> </ul>

<p>全体講評 大坂議長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 皆さんが自分の与えられた仕事を一生懸命しているのに、なかなか周りに認めてもらえない、仕事を理解してもらえないということを少なからず聞いている。</li> <li>○ 事業の源は地域包括ケアの介護予防。かみ砕いて言えば、元気な人がもっと元気である期間を長くする、少し弱ってきても集中的に色々やれば元の状態近くまで戻ることができる。</li> <li>○ 地域包括ケアの介護予防によって、地域の方々が第9期計画や地域福祉計画を作る際のアンケートでも答えている“いつまでも長く住み慣れた所に居たい”希望が実現できる。</li> <li>○ しかし何故一生懸命やる皆さんのことを理解してもらえないのか、上手くいっていると思っていることの広がりが進まないのか、理由として地域包括ケアが一人ではできないことが挙げられる。自分の所属している団体にわかってもらえているのか。</li> <li>○ 元々の保険者である自治体がこの事業についてしっかりマネジメントできているのか。その上で住民の“いつまでも住み慣れた所で暮らしたい”の実現に近づいているのか。回数よりも成果が求められている。</li> <li>○ やらなければならないのは皆がこれを説明できること。今日の情報交換会の話をも所属しているところで共有していただきたい。新たなつながり、新たなものが生まれて、住民のありたい姿に近づいていけるよう一緒にやりたい。</li> </ul>
----------------------	--

区分・会場	県北部 エポカ21 清流の間
開催日時	令和6年12月3日(火) 午後1時30分から午後3時30分まで
出席市町村 (出席者数)	石巻市(5)、気仙沼市(7)、名取市(3)、登米市(8)、栗原市(11) 大崎市(10)、色麻町(1)、加美町(4)、女川町(2)、南三陸町(3) 合計54人
アドバイザー (連絡会議会員)	東北福祉大学 教授 高橋 誠一 氏 仙台市健康福祉局保険高齢部地域包括ケア推進課 松本 庄平 氏 宮城県社会福祉士会 真壁 さおり 氏 宮城県社会福祉協議会 地域福祉部長 及川 一之 氏
オブザーバー	全国コミュニティーライフサポートセンター仙台(1)
情報交換での 主な意見・内容	<p><b>テーマ①「協議体の進め方や内容について」</b></p> <p>・協議体のテーマや進行の工夫、活用方法 等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ SCとして地域を知るためにテーマごとにマップに落とし込み、協議体メンバーにも情報を落としてもらった。</li> <li>○ 自分だけではできないことを自覚すること。</li> <li>○ 話を聞いてくれる人だけではなく、反対の意見を言ってくれる人も大事。</li> <li>○ 最初から理想を求めない。やりながら協議体のカタチを変えていく。</li> <li>○ 協議体の現状について(ミニデイサービスリーダーの集まりを2層協議体と位置づけている。/住民懇談会にサロンの代表者が参加し、交通や買い物をテーマに話し合いを行っている。/サロンの代表者が月1回集まって話し合っている)</li> <li>○ 自治会、地区社協、包括、民生委員、まちづくり協議会を参集し開催。地域アンケートから課題抽出するもSC交代で中断。座談会形式にするなどの工夫。</li> <li>○ 地域福祉推進委員会を協議体とした。区長、校長、老人クラブ、施設長など団体の長14名が集う。脚の問題、男性のひきこもりなど毎回テーマを決めて行うが先に進まない。</li> <li>○ 脚の問題が深刻。協議体で市民バスに乗った。バス停までの脚がないことがわかる。住民乗り合わせ事業を取り入れようとしている。協議体委員は、区長、民生委員、元気な高齢者、寺の住職。</li> <li>○ 住民と地域振興会でワークショップ。30～50代で構成されている地域づくり委員会。地域で交流の場をつくり、定期的に開催。</li> <li>○ 個別に協議体委員にヒアリングする。内容を忘れないように、熱量が冷めないようにしている。</li> <li>○ 2層協議体の意見を吸い上げ、ガイドマップづくり。集いの場、見守りについて、宅配の情報を掲載。</li> <li>○ 協議体委員委には役付きの人ではなく、実際に現場で活躍している人に担ってもらっている。</li> <li>○ 自然に話せるような工夫をして雰囲気づくりを大切にしている。</li> <li>○ テーマに合わせて流動的にメンバーを入れ替え。</li> <li>○ ネットに載っていない情報を聞き出す、書き出す。</li> <li>○ 囲みながら話せる工夫(模造紙を使う)</li> <li>○ 会議だけでなく、イベントや視察などを取り入れる。</li> <li>○ 固定したメンバーではなく、流動的にしている。</li> </ul>

- 1～3層までの協議体がある。1層：行政、2層：福祉活動推進員研修会、3層：行政区
  - 1層がごみ出し支援についてテーマをくれ、2層で話し合っている。(各地域で起きていることを知り、1層がまとめる)
  - 災害やつながりの大切さをテーマに勉強会を実施
- テーマ②「関係機関との連携について」**
- ・他事業や各種団体、他部局、民間企業との連携 等
  - 公民館、包括、支え合い推進員との連携⇒年7回程度。年間通してフレイルや介護予防について講座を開く。脚の問題でターゲット層が来てくれない。
  - 中学校の先生が協議体に参加⇒「生徒をぜひ使ってほしい」とのことで、サロンに中学生を呼ぶこととなった。
  - 小学生が防犯マップを作成。住民と一緒に地域を歩く。子どもたちのお茶っこの参加。
  - 協議体の中で各団体の紹介を行う。知らなかった地域の資源を把握することができる。
  - 民協など他の会議でも関係機関と情報共有する。
  - 包括⇔コーディネーターが情報共有し、地域につないでいけるように一緒に訪問してフォローしている。区長さんに話を伺う。
  - 月1回のケアマネ情報交換会にコーディネーターが参加。
  - 買い物に行けない課題の実態把握⇒コンビニの移動販売につなげた。
  - 除雪の課題⇒区長、ボランティア事業所と連携
  - お役立ちガイドブック(ボランティアや団体情報が掲載)をコーディネーターが作成。地区のリーダー格の方へ配布。
  - 自立支援型のケア会議にコーディネーターが参加している。
  - 1層2層の連携が今後の課題
  - ケアマネや事業所にCoについて理解してもらえるようにしたい。
  - 協議体委員に新聞屋がいて、コミュニティ新聞を月1回作成して折り込んでくれている。
  - 民間企業も実は地域貢献したいと思っている。
  - 地域に根差した職種の方(例：警察官、郵便局員)にも協議体のメンバーに加わってもらえることがいいと思った。
  - 行政、社協、トヨタ、交通会社との連携によるデマンド交通の実施。
  - 何度も脚を運び関係性を築く。
- テーマ③「地域資源とのマッチングについて」**
- ・支援ニーズと多様な活動のマッチングの実践 等
  - 交通の便が悪い⇒市民バスやデマンドがよくわからない⇒協議体で実際に乗ってみよう⇒楽しい⇒移動サロンにつながった。
  - 地域を知るために出歩き自分を知ってもらう。イベントに顔を出す。
- テーマ④「今、力を入れて取り組んでいること」**
- ・協議体でこんな取組をしている
  - ・集めた地域資源を一覧にして、関係者に周知している
  - ・今後の展望 等
  - 社会参加できない方を把握して外出の機会をつくる⇒自分が何かをするより、地域を知っている方に動いてもらう。
  - 福祉体験学習⇒生徒に「高齢者」＝「弱者」ではなく、経験者であることや

	<p>学ぶことが多いことといった印象を与えられるような働きかけ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ サロンがある地区、ない地区がある。「サロンへ行きたくない」は、無理に誘わない。集いの場だけを大切にのではなく、地域全体を大事にする。</li> <li>○ 道の駅で男性の居場所づくり。</li> <li>○ サロン交流会⇒アンケートをとって活動の可視化。</li> <li>○ これまで社協として地域に出る機会が少なかった。地区の行事に顔を出し、まずは覚えてもらうことに力を入れている。</li> <li>○ 情報発信に力を入れている。コーディネーターが見つめて発信することでモチベーションアップになる。</li> <li>○ 地域包括ケアについて理解を得るため、マンガ、DVDを作成した。</li> <li>○ 地域資源の把握</li> <li>○ 結果を出すことだけではなく、進め方を大切にしている。</li> <li>○ 2層協議体で次年度のあり方を相談し、課題等を挙げて、地域に持ち帰ることができる内容に取り組みたい。</li> <li>○ 地域と社協で取り組む活動が被っていることがあるので、統一して連携していきたい。</li> <li>○ サロン未開催地区でのノルディックウォーク</li> </ul>
<p>アドバイザーからコメント</p>	<p>&lt;及川氏&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 協議体のやり方や力を入れるところは様々で良いと思う。それが出来るのはバックで社協の地域福祉担当の方に関わっていただいていることも大きい。一緒に地域づくりも進んで行く。</li> <li>○ 地域で暮らし続けられるように、“出来る限り”という視点をずっと持ちながら行っていることは凄く良い。</li> <li>○ コーディネーター、行政、地域住民が替わることでの上がり下がりはあるが当然である。そういう困った時に支え合い事務局があるので、是非相談していただき、アドバイザー派遣が出来るように声がけしてほしい。</li> </ul> <p>&lt;真壁氏&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生活支援コーディネーターやこれに関わる皆さんは地域づくりのファシリテーターである。</li> <li>○ ファシリテーターには4つの機能がある。 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 安心して発言できる場づくり</li> <li>② 一人一人の意見にしっかり耳を傾ける 褒める、勇気づける、声なき声にも耳を傾けていく</li> <li>③ 受け取った色々な考え方を見える化する</li> <li>④ 違う意見の皆さんをどう合意形成していくか。ファシリテーターが決めるのではなく、“決め方を決めて決める”ことが大切で、皆で決め方も決め、合意に導いていく。ファシリテーターとして関わると、見え方が違ってくるので是非意識して関わってほしい。</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;松本氏&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 悩みは共通する部分があり、仙台市でも同じような悩みがあるので非常に為になると思いながら聞かせていただいた。</li> <li>○ 横のつながりの情報交換は大事なので、今日の話は持ち帰り、是非展開してほしい。</li> <li>○ 仙台市の生活支援コーディネーターは2層（機能強化職員）が各包括に一人ずつ、計53人いるがどうしても孤立してしまうので横のつながりは凄く重要</li> </ul>

	<p>で、集まれる機会を作りたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 1月から仙台市では「相談支援サポートシステム」という地域資源をデジタルマップに落とし込んで見える化し、自分が居る半径何メートル以内にどうい う社会資源があるのか全部見えるようにし、来年1月から稼働させる予定であ る。また情報掲示板の機能も付けて集まらなくても情報交換できる機能も導入 していきたい。今その詰めの作業段階なので、本格稼働したら情報を提供した い。</li> </ul>
<p>全体講評 高橋副議長</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ この情報交換会はだんだん良くなっている印象がある。自分たちの活動を上手く 他の方に伝え、聞いた側は自分の中で生かしていこうという話が沢山出ていた。</li> <li>○ この事業を始める時、いくつかのポイントの中に一番重要だと思ったことが「生 活支援コーディネーターを孤立させない」ということ。</li> <li>○ この事業を実施する上で大切なこととして県の研修内容にも入れていた。皆さ んそれを上手く活用していただいている。</li> <li>○ この場でつながった皆さんが更に他の所でもつながって、困った時に相談でき ると良い。</li> </ul>